



写真に見る

115年前の長崎

日露戦争時代

姫野 順一

□ 31 □

## 茂木街道

明治30年代の茂木街道。写真師の竹下佳治と佳行の父子は、拡幅されたこの茂木新道を通って茂木へ撮影旅行をしたようである。写真①の左と写真②に写るのは同一人物で、佳行と思われる。

写真①の右の天秤棒を担ぐ少年は雇われた荷運びか。各種薬品を屋外の携帯暗室で処理しなければならぬ湿板時代に比べ、撮影が容易な乾板時代だったが、屋外撮影にはまだ重い機材の運搬が必要であった。

竹下佳治は旧姓打橋辰彌。上野彦馬の父俊之丞の友人で画家の北瀬崎御用米蔵預役、打橋半雨の孫である。彦馬に写真術を学び、竹下家に養子に入り本石灰町で写真館を開業した。息子の佳行は浦上山里村平ノ宿場の場頭をしていたが、明治30年代に写真館を継いで

②茂木街道沿いの竹林竹下写真館撮影、長崎外国語大所蔵



いる。顕微鏡写真を得意とした。写真①は新県道となった長崎街道の田上峠から下った転石付近、写真②はそれから少し茂木に進んだ河平の竹林である。茂木は県内最大のタケノコ産地であり、竹林

が多く竹製品やカゴの製造が盛んであった。

江戸時代の茂木街道は、田上から転石の険しい尾根筋を下り、若菜川上流の轟川にかかる柳山橋に向かい、打越の山腹の小高い道から裳着神社に出て若菜川口に下る細道のルートであった。古道は明和6（1769）年に長崎の江波市左衛門により軟らかい蛇紋岩である温石の石畳が敷かれ、安政5（1858）年には出来鍛冶屋町の竹内徳助と東築町の蒲池喜兵衛が石橋の柳山橋を架けた。荷物は番所に登録された運搬夫の指が注文を受け、肩に担がれるか牛馬に乗せられて運ばれた。

古道は急こう配で荷馬車や人力車が通れなかったため、長崎県は明治18（1885）年に道路の拡幅を計画した。転石の谷を七曲りにして下り、川そばの森を抜けて若菜川下流の合流点に出る、広く舗装された県道が明治20年に完成した。昭和9（1934）年には山腹を通る県道が整備され、これは昭和45年に国道324号線となった。

（長崎外国語大学長）

この企画の過去の記事、写真は長崎外国語大のホームページ（<http://www.nagasaki-gaigo.ac.jp/recnas/newspaper/>）で見ることができます。

# 拡幅、舗装された新県道



のデジタル  
にアクセス  
できる  
QRコード

随時掲載します